春期福音特別集会 第2回
キリスト者の望（霊望）
――ローマ書第8章18～30節――

１９７４年３月23日（伊豆高原）
小池辰雄

神秘的一如の世界　私のところに来い、力をやるよ　神の子たちの現れんことを待つ　自然法・道徳法・霊法　一切の人間の問題は結局、心の問題　望みの実体はキリストという天国体　望みによりて救われた　キリストというひとは無者　御霊の言い難き呻き　マイナスをプラスにしてしまう　予知・予定・召命・義認・栄化　福音の証

【ローマ8・18～30】

18われ思うに、今の時の苦難は、われらの上に顕れんとする栄光にくらぶるに足らず。19それ造られたる者は切に慕いて神の子たちの現れんことを待つ。20造られたるものの虚無に服せしは、己が願いによるにあらず、服せしめ給いし者によるなり。21然れどなお造られたる者にも滅亡の僕たる状より解かれて、神の子たちの光栄の自由に入る望みは存れり。22我らは知る、すべて造られたるものの今に至るまで共に嘆き、ともに苦しむことを。23然のみならず、御霊の初の実をもつ我らも自らの心のうちに嘆きて子とせられんこと、即ちおのが体の贖われんことを待つなり。24我らは望によりて救われたり、眼に見ゆる望は望にあらず、人その見るところを争でなお望まんや。25我等もし其の見ぬところを望まば、忍耐をもて之を待たん。

26斯くのごとく御霊も我らの弱を助けたもう。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き嘆きをもて執成し給う。27また人の心を極めたもう者は御霊の念をも知りたもう。御霊は神の御意に適いて聖徒のために執成し給えばなり。28神を愛する者、すなわち御旨によりて召されたる者の為には、凡てのこと相働きて益となるを我らは知る。29神は予じめ知りたもう者を御子の像に象らせんと予め定め給えり。これ多くの兄弟のうちに、御子を嫡子たらせんが為なり。30又その予め定めたる者を召し、召したる者を義とし、義としたる者には光栄を得させ給う。

●神秘的一如の世界

ローマ書8章がまさに「信・望・愛」なんです。今晩のところは「望」です。

1節から17節までが「信」。
18節から30節が「望」。
31節から39節が「愛」です。

こんなようにつかまえている注解書はおそらくないでしょう。私の見た範囲ではそういうのはない。私はこれがパッときてしまったわけです。御霊が内住しなければ、即ち宿らなければ、本当の信ではない。信仰が本当の本ものでない。

「キリストの中に」
「エン・クリスト」

というこの一言を忘れるなとさっき言いました。「キリストの中に」という、「中」の世界です。

「お前は私のものだ。私はお前のものだ」

というのはベートーベンの有名な「不滅の恋人」に対する言葉です。あれもまさにそういった「中」という一如の姿です。旧約聖書の雅歌書もそうですが、いわんやこのキリストとの間柄というものは、そういう「我と汝」というようなことを、ただ対象的に考えていては、いくら親しくなってもダメなんで、その中に没入して、

「俺がお前だか、お前が俺だかわからない」

というような友情であったら、それが本当のフレンドシップだ。

「あいつのためには生命を捨てる」

というようなのが、

「人その友のために生命を捨つる。これより大いなる愛はなし」

ということです。「中」ということは要するに、一体ですね。「ウニオ・ミスティーカ」「神秘的合一」という。あるいは、「コンウニオ・ミスティーカ」という。よく神学者は、「ウニオではいかん。コンウニオでなくてはいかん」というようなことを言う。即ち、福音的な神秘というものは、「コンウニオ」であって、単なる「ウニオ」ではいかんと言う。まぁ、そう分けたっていいけれども。もう「我が彼か、彼が我か」というような合一の世界です。

「我を見し者は父を見しなり」

というのは正にそういった合一の世界だからね。キリストは正にそうだった。

とにかく、キリストに帰ればいいんですよ。キリストは父とどういう関係にいらっしゃったかというと、ピタリ一つなんだ。我々は、キリストのようなピタリ一つはできないんです、罪びとだから。けれども、いくらこちらが矛盾構造であろうが、投げ入れたときには全的に投げ入れているんだから、そんなことを分析しない。そういうのが「一つ」ということ。そういう「ウニオ・ミスティーカ」という神秘的一如の世界です。私は、合一とか一如という言葉が好きなんです。それはさきほどやった信の世界です。だから、信はそのような現である。これほど現（うつつ）な世界はないわけです。

ここにコップがあるということを認識するよりも――このコップの中の水はコップの姿に完全になっている――このコップの中の水のように、コップの姿と完全に一つとなっているこういう非常に柔軟性、こういうのが本当に中の世界です。合一、一如の世界です。キリストとそのような一如の世界にいたのが使徒たちの信仰の世界です。

だから、ペテロが、

「我を見よ」

と言ったんです。パウロがあれだけの苦難を突破できたのも、この合一が本当にズレのない溶け合いの世界になって、キリストというひとが中に溶けてしまっているわけだ。キリストという光が完全に中に浸透している。これが信です。およそ普通に考えられている信仰なんていうのとはちがう。その事態を信ずるとなったら――何と言うかね――その事態を信ずるということは、こちらが正にその事態であるということの、信ずるという言葉と同時にパッとその世界に入っている。これが信の世界です。だから、この信ほど実はまことの世界はない。信は即ち真なりと言ったっていい。

そういった信というものは、これは御霊が来なくては、どうにもならんですよ、そういう事態は体感できない。だから、「信受」をもうひとつ「体受」と言う。身体(からだ)で受けとる。全存在で受けとる。「体」というのはただ肉体という意味ではない。全存在で受けとっていることが即ち、体受ということです。頭でも、ただ心でもない。あるいは、ただ霊でもないと言ってもいい。全存在である。この肉体もろとも、全存在に完全に、本当に霊が頭の先から爪先まで浸透しているような、ウワーッとくるそういう世界です。そうしたら、矛盾もへったくれもない。矛盾であって一向差し支えない。そこでもう完全に霊的変化が起きています。そういった信の世界。これがさっき言った8章1節から17節までの、さんざんパウロが「御霊」だとか「聖霊」だとか「神の御霊」だとか「キリストの霊」だとか言って、その「中に、中に」と言っているのが、それなんです。

●私のところに来い、力をやるよ

18 われ思うに、今の時の苦難(くるしみ)は、われらの上に顕(あらわ)れんとする栄光にくらぶるに足らず。

「われらの上に」とは、「われわれの中へと」です。我々の中に顕れんとする栄光に比ぶるに足りない。あるいは、我々の中にのしかかってくるような栄光です。パウロはこの終末の驚くべき栄光を目の当たりに見ているわけです。だから、

「今の時の苦難は、キリストの再臨の時に顕れるところの、我々の中にやってくるところの栄光とは比較にならない」

と。どんな患難にも突破していくぞと。人間というのは、やせ我慢したってダメなんです。十字架を負うと言ったって、これは上から力が来ていなければ負えない。

「己が十字架を負いて我に従え」

とキリストが言われるけれども、あのキリストが仰ることは、もし手放しだったら、これは不可能なんです。聖書の言葉は烈しいからね。ただこの不可能なことを水を割らずにキリストは私たちにぶつける。それはなぜ、不可能なことを、我々にできそうもないようなことを仰るかというと、

「もの凄いものが上からくれば、みんなできる。それを受けないから福音が福音にならないんだ」

というわけです。普通の教会ではそれを一生懸命で、何か勿体ぶって受けとろうとするから、苦しくてしょうがない。

「それはできません。主さま、そんなことを仰っても、できません」

と言って降参してごらん。そうしたら今度は、キリストがさせてくださるから。降参しないで、できるような顔をしているから、さっきの「アズ・イフ」（かの如く）だから、いつまでたっても不可能なんだ。できないなら、「できない」と兜を脱げばいい。平伏せば、そこに力が来るんです。ぶっつぶれないから、みんな力が来ない。ぶっつぶれれば、力が来る。だから、苦難であろうと何であろうと、みんなこれを負わせてくださる。

「大丈夫だ。私のところに来い。そしたら、力をやるよ」

と。そうですよ。「十字架を負いましょう。どうやって、どれくらい負えるでしょうか」なんてやったって、それは五十歩百歩だ。

●神の子たちの現れんことを待つ

19 **それ造られたる者は切に慕いて神の子たちの現れんことを待つ。**

これはいい言葉だね。再臨の時の、そういった神の子たちの現れんことを待つという。「造られたる者は切に慕いて」というのは、これは被造物だよ、人間ばかりではない。自然、大自然、自然天然。自然にも心がある。ユダヤなんて広漠たる所だけれども、しかし、あそこは非常に立体的でいろんな面があります。パウロはその自然においてそういった、「切に慕いて」待っている、待望している、恵みを待望している世界を思っている。大自然も待っている。虫けら一匹にいたるまで。

私はずっと小さいときに、蝉が死んでいる姿をみてかわいそうに思って、

「ああ、この蝉も息を吹き返させてやりたいな。神さまの国が来たら、これも甦るのではないかな」

なんてなことを子ども心に思ったことがある。シュバイツァーが「主の祈り」の一番終りに、

「小さい、祈ることも知らない動物のために憐れんでください」

というようなことを付け加えたという。さすがはシュバイツァーです。「生命に対する畏敬の念」という彼の哲学ですけれども。虫けらひとつも彼は殺さなかった。だから、何でも

彼のところに寄ってきたという。アッシジのフランシスみたいに。

チャップリンだってそうだよ。彼は毛虫を踏みそうになったときに、ハッとその踏もうとした足を引っ込めて、その毛虫をつまんでバラの花の中に入れてやった。私は映画のあの光景を見たときにパッときた。やっぱりチャップリンという人は弱者に対する何ともいえない気持を持っていたなと。およそ生きとし生けるものにはみな存在の理由がある。万物善からざるは無しというわけだ。けれども、とにかく、みな何かを待っている。このことはもう少しあとでハッキリ出ている。

20 **造られたるものの虚無（むなしき）に服せしは、己が願いによるにあらず、服せしめ給いし者によるなり。**

造られたものが虚無に造られたということは、はかなきものになったということはこの人間の罪の故です。人間は本来はパラダイスであったが、パラダイス・ロストになってしまったんだから。それで大自然自身が今度はロスト・パラダイスになってしまった。だから、それは「己が願いによるにあらず、服せしめ給いし者」、神さまの御意によって、大自然も人間の罪のためにそのような姿になってしまった。大自然には素晴らしい調和がある。けれども、しかしながら、そこにそれならざるところのものをもうひとつパウロは見ている。そこが素晴らしいわけです。

21 **然れどなお造られたる者にも滅亡（ほろび）の僕たる状（さま）より**

あるいは、破れの僕たる姿より、

解かれて、神の子たちの光栄の自由に入る望みは存（のこ）れり。

この自然界を見ても、いろいろ惨憺たるものである。たとえば、自然の春夏秋冬でも、時にはすっかり雨が降らなかったりして、大飢饉になって、穀物なんかが全部枯れてしまったり。これはやっぱり、自然が自然の法則に反することをやっているわけだ。本来はそうでないはずなんだ。自然に狂いが生じてくる。大きな嵐がきて、大災害をもたらしてみたり。適当な風ならいいよ。けれども、大嵐になって、たとえば、12年前に私がハンブルクにいたときに、忽然として大暴風雨になった。これは120年振りだそうです。全く不意をうたれて、ハンブルクで400人の犠牲者が出てしまった。エルベ川が氾濫した。これはやはり大自然がひとつの法則を破ったやり方をしているわけだ。そういった、自然にも法則がある。

●自然法・道徳法・霊法

法則といえば、８章2節、

2 **キリスト・イエスに在る生命（いのち）の御霊（みたま）の法（のり）は、なんじを罪と死との法より解放（ときはな）したればなり。**

「キリスト・イエスに在る」は、これも「キリスト・イエスの中に在る」ところの生命の御霊の法です。要するに、キリスト・イエスは生命に決まっている。そして、生命の在る

ところのそういった御霊の法、霊法です。それから自然の法則、自然法。そして、人間の道徳法則、道徳法。これはみんな法の世界だ。ダルマです。

物理学の法則がこの自然法だ。物理の法則。すべてが法則で動いている。人間の世界も道徳法を破るから、おかしなことになる。これは何といっても、カントの『実践理性批判』は世界的な名著です。やはりカントさんあたりはしっかり読まなくてはいかんですよ。すべての哲学はカントに流れ入りてカントより出るというわけだ。また、自然の法則。アインシュタインにおいて非常なところまで来ましたね。そういった物理学の法則。天然の法則。「天然はいいなぁ」というのは、全部これは法則に従っているからいいなぁというわけです。

それから今度は、霊法。霊界の法則、宗教界の法則。これは厳然たるものです。最高の法則だ。キリストはこの霊法によって物理法則を乗り越えてしまって、海の上を渡ったりした。あれは奇蹟でも何でもない。霊法の世界なんです。およそ奇蹟なんてものはありはしない。あれはみんな霊法の世界です。分からないから、奇蹟だなんて言うけれども。私たちだって物理のことが分からないから、テレビが映るなんていうのは奇蹟だよな（笑）。これはどうも毎日、奇蹟を見ているようなものだ。ところがそれは物理の法則の世界です。霊法・自然法・道徳法というわけです。

「わが思うところ法（のり）を超えず」
（「七十にして心の欲する所に従って矩（のり）を踰（こ）えず」（論語））

というのがある。法則の世界を超えない。自分の欲することが法則に従ったと、孔子が七十のときに言った言葉だ。私の歳だ。やはり孔子は偉いな。孔子先生は七十になって、「ヴォレン」（したい）と「ゾッレン」（すべき）が一つになったという。

けれども、私はそんなところを経ないで、ひとっ飛びにこっちに来てしまった。キリストの霊法の世界に我々はいる。霊法の世界に来て、もっと自由な、もっと素晴らしい法則の世界です。本当の自由はここにあるんだから。霊法の世界に。霊法に完全に乗っかっているのが自由です。

たとえば、物理の世界で、燕（つばめ）が飛んでいるところを見てくださいよ。ヒューンと行ったかと思うと、もの凄く180度急転回してこっちに来るだろ。あんなことを飛行機がしたらみな落ちてしまう。どんなジェット機だってできやしない。ああいうもの凄い飛び方をする。私はもし人間でなかったら鳥になりたいな。あの鳥が天津風に乗って自由に動くところは、もう何とも言えない。時々、テレビで見るが、ああいうのを見ていると、私はもう見とれてしまう。あの鳥の翼というものはそういう自然の法則に完全に乗っている。あなた方はああいうのを見て、何とも言えない気持で見ないんですか。どうも、驚嘆の仕方が足りないね（笑）。偉大な人はくだらないことに驚嘆する。

霊法に乗っかって自由自在だったのは、お釈迦さんとかキリストですよ。これは本当に霊法です。こちらの一流の坊さんだとか、パウロさんだとかいうのは、みなその世界にハッ

キリ乗っかってしまっている。その法則に本当に乗っかってしまうのが、絶対に微妙な妙境です。こっちの自由の方が、道徳法則で自由なんて言っているのよりかはるかに上です。

道徳法則のカントが言うような自由すらも分からないで、勝手気儘の、法則を破っていることを自由だなんていうのはとんでもない話なんだ、今の民主主義なんていうものは。もう、あなた方は絶対にあんなへんてこな民主主義には敢然として反対して逆行しなければダメですよ。

●一切の人間の問題は結局、心の問題

法則の世界。だから、「生命の御霊の法」というのは素晴らしい言葉です。

「キリスト・イエスに在る

ところの、中に乗っかってしまっているところの、本当の、

生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法より解放したればなり」

と。「罪と死と律法」という三つのもの――いわゆる律法ですよ、律法の義というやつ――に縛られてしまう。罪に縛られ、律法に縛られ、死に縛られている。そういった法から解放した。パウロという人は「法」という言葉が好きだから、そこに「法」という言い方をするわけです。

22 **我らは知る、すべて造られたるものの今に至るまで共に嘆き、ともに苦しむことを。**

「嘆き」は「呻き」と訳した方がいい。この「呻き」という言葉が三回使ってある。ギリシア語で「ステマゾー」という字です。この「呻き」は言葉にならない。罪によってすっかりゆがんでしまった、法則からずれてしまった、その世界。「罪」というのは要するに、法則からずれていることが罪なんだ。神さまとの関係がちゃんと立っていないことが罪ということで、要するに、霊法からずれていることが罪なんだ。そのためにいろんな混乱が生じ、争いが生じ、ついには滅亡を刈り取るというような、非常に危機的な終末的な現象です。

20世紀はへたすると、あと25年でお終いだなんていういろんな角度から、大気が汚染してくるとか、地下水がなくなるとか、人口が増大して食料危機になるとか、核兵器がいっぱい放されるか分からないとか、何とかかんとかといろんな要素が危機的に迫っている。何が恐いかというと、核兵器が恐いのではない。人間の法則を破っている心が恐い。一番恐ろしいのは心なんです。心は天国に属すると同時に地獄に属する。天心となるか、地心となるかなんです。地心となって本当の地震が来てしまう。そういう心が、天心に、天の心に、神に付くか、あるいは地獄のサタンの手下になるか。そのサタンの手下になって、今、サタンに籠絡（ろうらく）されつつある。これが恐ろしいはなしです。ヤコブ書に言われているとおり、結局、

「争いの元は欲心である」

という。もうすべての問題は、一切の人間の問題は結局、宗教の問題、心の問題に帰着する。問題が経済であろうが、何であろうが、人間の営みは全部、人間の営みの根底は心だから、この心の解決がしない限りは恐ろしいことになることはハッキリしている。だから、一切の問題は結局尽きるところ宗教の問題になる。それを一番おろそかにして、宗教だけは、信仰の事態だけは、そっちのけにしている。だから、もう20世紀は危ないことはハッキリしている。

そして、一番悪いのは教育者です。教育者が一番目覚めなければならないのに、この教育者がこれから一番遠い。小学校から大学の先生にいたるまで。もうこんなことをしていたら、学制をどんなに改革しようが何しようがダメですよ。改革する一番大事なことは、先生の心を改革しなくては。

そういう心のところにくる。それで結局、それがために自然界もゆがんで、そして全き世界が来ることを呻き求めている。自然界の呻きです。藤井先生の『羔の婚姻』という偉大な詩の中に自然の呻きを書いているところがある。非常に印象的なところがありますから、読んでごらんなさい。先生は武蔵野を散歩しながら、何か自然の呻きを聴くようなことを書いてあった。何ともいえない、自然の中の寂しさというもの、悲しさというものを。

それをパウロは本当に、自然の心を心として――日本人は自然と非常に溶けて、こころとするけれども、そういった意味でこの自然の呻きをおそらく、今までの日本の詩人は聞いたか聴かないか――ところが、パウロは非常に深刻にそのことを聴いている。それをここに訴えている。

●望みの実体はキリストという天国体

23 然(しか)のみならず、御霊(みたま)の初(はじめ)の実をもつ我らも自らの心のうちに嘆きて子とせられんこと、

「嘆きて」ではなく、「呻きて」です。

「御霊(みたま)の初(はじめ)の実をもつ我らも自らの心のうちに呻きて、全く子とせられんことを」

と。これは神の国を受けるところの終末的な希望です。神の国が来て、本当に神の子とせられんこと、

即ちおのが体の贖われんことを待つなり。

魂ばかりでなく、身心共に全存在的に贖いとられる、復活体とせられる。そのことを待っている。人生は結局、私たちは死に至る。万人は死なざるをえない。その先は分らん。とにかく、死は悲しい。しかし、それでお終いではない。それを乗り越えて、いや既に私たちは死に打ち勝つ世界をいただいているから、このからだも霊体をつけられて、完璧に身

心共に贖いとられる時を呻き待っている。

この望みがなかったならばもう窒息してしまう。人生を福音的に考えないで、真剣に考えたら自殺するのが本当かもしれない。芥川龍之介なんかはそういう角度で亡くなった魂だったんでしょう。

24 我らは望(のぞみ)によりて救われたり、眼に見ゆる望は望にあらず、人その見ると
ころを争(いか)でなお望まんや。

「望みによりて救われたり」と、妙な言い方をしている。望みによって救われたという。即ち、この望みというのは願望ではない。望みは上から与えられたんです。信も上から与えられる。望も愛もそうです。全部これは上から来ている。なぜ上から来ているか。本願があるから。神の本願がある。世を救わんとするこの神の意志は本願でしょうが。世を救わんとする神の意志があるからこそ、望みがある。神の本願があるから救われている。本願をいただくことが我々にとっては望みなんだから。願望ではない。

その望みは必ず成るんです。本願は必ず成る。いわゆる人間の希望だなんて思うから、「はて、希望はたっせられるでしょうか」なんて言う。そうじゃない。この希望は必ずたっせられる。必ず成るんです。望みは成就する。なんとなれば、望みは上から与えられたものであるから。キリストが復活の生命と聖霊を、この事態を上から来させて、望みがないことはない。これらはみな復活体です。この聖霊が来て、そして本当に復活体となることの、キリストは実証でしょうが。実証している。イエス・キリストは望みの実体だから。

「望みによりて救われた」

ということは、

「キリストという望みの実体が来たから救われた」

と言って一向差し支えない。

キリストという望みの実体、我々の望みの実体は天国体なんだ。天国体がやって来たので、私たちは天国に行くことはハッキリしている。どうせ、この人間の世の中は善くなりっこないですよ。これは聖書が言っているとおり、今に引っくり返るよ。しかしながら、どんなことになろうとも、たとえ第三次戦争が来ようが、絶対に我々の望みは失われない。それだけの烈々たる望みをいただかないで、何の生きがいがあるかと。地上は人生の序曲にすぎない。私たちの人生の本局はあっち側でござると。そういうわけです。

今の日本には本当に偉大な思想がないね。偉大な思想がないということは偉大な信仰がないということなんです。単なる人間の作り出した思想でなんか救われるものか。プラトンがいかに偉大な哲学者であろうとも、プラトンによって一人の人が救われたかというと、救われていない。救いはただキリストからだけ来る。

●望みによりて救われた

23 **然(しか)のみならず、御霊(みたま)の初(はじめ)の実をもつ我らも自らの心のうちに嘆きて子とせられんこと、**

「御霊の初の実をもつ我らも」というのは、

「御霊の初の実となっているような自分たちも」

と言ってもいいくらいです。

「自らの心のうちに呻きて子とせられんこと」

信仰的現実では救われているのだけれども、生まの現実で救われるのは新天新地が来たときだから、それを呻いて待っているという。いつかは私たちは死ななければならないから、死を突破して行かなければならない。

即ちおのが体の贖われんことを待つなり。

パウロは繰り返し、「体」とか復活のことを言っているわけだ。

4 **我らは望みによりて救われたり、**

望みの実体があって、それによって生きているから、ハッキリ救われているわけだ。

眼に見ゆる望は望にあらず、人その見るところを争(いか)でなお望まんや。

とパウロが言っているが、私はこのパウロさんのもうひとつ奥を読む。即ち、

「眼に見ゆるところの望みは望みでない」

というのは、仰るとおりだけれども、キリストという実体は私たちに眼に見えている。なるほど、私たちはキリストを知りませんけれども、聖書によって伝えられているイエスという方は、二千年前も今も同じこと、天界に生きていらっしゃる。地上にいらっしゃったキリストは知らないけれども、私たちは、天界におられるキリストはハッキリ御霊の世界で、見えざる肉眼でない眼でもって見ているわけだ。心眼で。だから、実はそういった今、見えないものは見ている。聞こえないものを聞いている。触れないものに触れている、という信仰の現実です。これが望みの確証なんです。

「信仰は望むところの確証である」

と、ヘブル書11章1節に書いてある。見えないんだけれども、実はもうひとつ奥の世界では見ていますよと言いたいところなんです。

25 **我等もし其の見ぬところを望まば、忍耐をもて之を待たん。**

それはまぁそうですけれどもね。肉眼では見えないさ。けれども、キリストは霊界にござるということはハッキリ信仰の眼で見ている。なにか霊的現象のことを言っているのではないですよ。霊的現象で見えることもあるさ。

そういうような世界で、いよいよもって忍耐をもって待てるんです。忍待、忍び待っている。耐え忍ぶのも結構ですけれども、その忍ぶこともできるのは、艱難になお耐えて忍ぶことのできるのは、艱難に打ち勝つところのものがあるからです。私みたいな弱虫が――私は

君たちの中で一番弱虫だ――一番弱虫がどうしてこのように強くなったか。なぜ強くされているか。強くもないんだ、あいかわらず弱いんだ。けれども、私は強い。

「我弱きときに強し」

とパウロが言ったとおりだ。それはキリストが強いんです。もう、自分の弱い強いとか、利口だバカだとか、清い清くないとか、なんとかかんとかと、そんな相対的な判断は一切要らん。その判断をやっているうちは、いつまでたっても本当の世界に入れない。矛盾があろうがなかろうが、そういうことではないんです。

●キリストというひとは無者

私はずいぶん乱暴なものの言い方をするから困るかもしれないけれども。頭で分かろうとしたってダメだよ。私という人間はそれでなければやり切れない。キリストの恩寵は絶対というなら、私は水を割らずに絶対だと思っている。だからもう、もの凄いものが来るんです。

イエス・キリストを見てくださいよ。彼は、

「われ何事をも為し能わず」

「私は何もできない」とハッキリ言ってらっしゃるではないですか。ああいうところを牧師さんたちはハッキリ読まないとみえるね。「キリストは何でもできる」なんて、はじめから決め込んでいる。

「なぜ、私を善いと言うか」

と、キリストは「ちっとも善くはない」と言っている。これは謙遜でもなんでもない。本当にキリストはそう思っている。

「キリストというひとは無者だ」

と、私は何回言ってもしょうがない。私心がない。無私者なんだ。「無者」と言うと、なにか何も無くなってしまって、虚無主義かと思っているが、そうじゃないんだよ。

「自分を何ものともしない」

と言って、明け渡していることくらいもの凄く楽で、もの凄く素晴らしい世界はないんですよ。上から来るから。瞑想してくださいよ。まだ、若い人は自分によいものがあるものだから、「無者になるのは惜しいな。私だって知恵もあるし、力もあるし」なんて言って、惜しんでいる。ダメです、そんなことをしているうちは。そんなものは何だと言って、吐き捨てるようでなくては。

「己を憎まずばわが弟子となることができない」

とキリストが言われたじゃないですか。自分を本当に憎まなければ弟子になれない。「己を憎まずば」とはどういうことですか。反対に言えば、

「私（キリスト）を愛する」

ということです。キリストは、

「お前は私を本当に愛してごらん。自分なんてものは問題でなくなるぞ。自分を吐き捨ててごらん。そうすれば、もの凄いことになるぞ」

と。その気合はあの禅宗で言うような無とは違う。もっと凄いんですよ、このキリストの無は。私は禅宗のものも読むけれども、どこか足りない。それはやはり、禅宗もなかなか素晴らしい世界だけれども、この福音の世界の、私が言う無はもっと凄いんです。無即無限無量、無量寿無量光という世界。無量寿無量光という世界は実は福音が持っている。阿弥陀さんの世界もそうだけれども。

●御霊の言い難き呻き

26 斯くのごとく御霊も我らの弱(よわき)を助けたもう。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き嘆き（呻き）をもて執成(とりな)し給う。

「呻き」という字が三回出ている。この26節は私の兄貴が非常に好きな句で、英語で白い布に書いて英語の聖書に挟んであった。私はそれを発見して、それを額にして集会所に掛けている。あれがローマ書8章26節です。

「世界苦」という言葉がある。世界的な、宇宙的な呻き。神の国の来らんことに対するところの呻きは即ち祈りです。祈りは呻きとなる。これは祈りの呻きです。まだ大声で祈っているうちはいい。そのうちに呻きになってしまう。宇宙の深刻な祈りはこの呻きなんです。呻きは時々、沈黙にもなる。これが即ち、宇宙の呻きの祈りを代表するものが「御霊の呻き」です。だから、ローマ書8章26節というのは一番深い、なんとも言えない祈りの世界です。

我々のどうにもならない呻きに対しては、御霊がちゃんと執り成していらっしゃる。御霊の呻きが執り成していらっしゃるから大丈夫なんです。この御霊の呻きによって、どのようなことでありましょうとも、もう大丈夫です。あるがままに自分をそのまま投げ出してごらん。人間が解明できて説明できるような世界は大したことはない。もうひとつ奥の世界です。

内村先生は文学をけなしたけれども、それは文学的な表現だけが、あるいはできるかもしれない。あるいは音楽。文学、音楽あたりがその表現ができる。ベートーベンや何かの中にはそういうのがある。そして、蛙の声の中にも呻きを聞くだろうし。とにかく、何ともいえない静けさの中に何か呻きが聞こえてくる。そういうのをみな深く受けとっているのが聖霊の呻き、御霊の呻きです。

「御霊みずから言い難き呻きをもて執成し給う」

というのは素晴らしい言葉です。私は大好きな言葉です。人生は、地上でどんなに失敗しても、どんなにいわゆる自分の願望がかなえられなくても、どんなに人に誤解されても、どんなに迫害されても、御霊の呻きは執り成したもう。そして、その呻きは必ずその人を

素晴らしい世界に連れていく。

私の兄貴もまさにこの呻きをもって次の世界に行った男です。だから、この言葉が非常に響いたわけなんでしょう。27歳くらいで仆れるような男ではなかった。本当に使命があった。それが仆れたから、それからの私の生涯は彼のための弔い合戦なんだ。私は何歳になっても、兄貴は決して忘れることができない。時々、夢の中に見える。

そういう、人生には割り切れないところのものがある。また、自分で始末のつかないものがある。いいですよ。それはパウロが、

「なんとかして、この刺(とげ)を」

と言う。パウロもまた刺を取ってもらいたいことがあったらしい。パウロがそれだけのことを言うということは、彼自身が本当に呻きの魂だったから。だから、自然の呻きを聞き、また御霊の呻きを、また自分たちクリスチャンの呻きを彼はここで告白している。私は、ローマ書の中で一番深いところはここだと思っている。

望みは上から来ているけれども、しかし、それに対しては、聖霊自身がその望みを遂げるまでは呻いていらっしゃる。人間の書いている歴史なんてものは大したことはないよ、上っ面な歴史ばっかりで。本当の歴史というものが天界に書かれている。それはそのような世界を知っている詩人だけが――ダンテあたりはそれをかなり知っているね――それを描いている。

人間は結局、すべては本当は魂の祈りなんです。呻きなんです。しかし、その呻きは御霊によって支えられ、御霊によって力づけられて進んでいく。大丈夫です。

「御霊みずから言い難き呻きをもて執成し給う」

という。やり切れないときには、この句に来てください。そうしたら、深い慰めが来ますから。「執り成し給う」んですから。執り成している。祈り深いところがこの執り成し、愛の執り成しですから。

●マイナスをプラスにしてしまう

27また人の心を極めたもう者は御霊の念(おもい)をも知りたもう。御霊は神の御意に適(かな)いて聖徒のために執成し給えばなり。28神を愛する者、すなわち御旨(みむね)によりて

「御旨」はもちろん神の愛の御旨によって、

召されたる者の為には、凡てのこと相働きて善となるを我らは知る。

「すべてのことに神さまが共に働いている」

と意訳してもいい。この「すべてのこと」は、どんなことでもですよ。どんなに自分にマイナスなことであろうとも、迫害であろうと、誤解であろうと、何であろうと、一切のことが相働いて、善となる。すべてが善に、「善いかな」というところに持っていく。

それは即ち、「御旨によりて召されたる者の為に」です。神さまの意志によって、本願によって召された者。私たちはみな神の本願で召された者です。こっち側の何ものによるのでもない。みんなお互いさまダメなやつばっかり。そういうのが「召されたる者」です。人生で出っくわすどのようなことでも、「ああ、こんなことはしなければよかった」とか、「こんな失敗をした」とか、「とんでない目にあった」とか、「こんな悲しいことがあった」、「ひどい目にあった」とか、いろんなことがあるさ。そういったようなことが、この信ずる者、神を愛する者にとっては、すべて相働きて善となる。善の本当のプラスになる。過去のどんな経験も――嫌なことは忘れたっていいけれども、ただ忘れているというのではない――必ずそれを乗り越えるんです。乗り越えて、マイナスをプラスにしてしまう。相対的なプラスも相対的なマイナスも、本当のプラスにしてしまう。絶対的なプラスに、福音的なプラスにしてしまう。だから、

「為(せ)ん方尽くれども望みを失わず、倒さるれども滅びず、常にイエスの死を負う。これイエスの生命の顕れんためなり」

と彼は言った。その通りです。だから、人生行き詰まりがなくなってしまう。失恋したって何だっていいよ。それで絶望なんかしないように。

すべてのことが相働きて善となる。ということは、一切の経験を通して、ただキリストに向かって行く。すべての経験を通してキリストをより深く受けとることなんだ。

「我はキリストなり」

なんて言ってはいけないけれども、それくらいな気持にもなる。ドイツ語では、クリスチャンのことを「クリスト」と言うから、「私はクリストである」なんて言うと、「なんだお前はキリストか。気が違ったんではないか」なんて、そうじゃない。「クリスチャンである」ということになる。これはまぁ半分冗談ですけれども。とにかく、パウロの言葉は何といっても、一言一言がもの凄い力を、中味を持っている。

●予知・予定・召命・義認・栄化

29 神は予(あらか)じめ知りたもう者を御子の像(かたち)に象(かたど)らせんと

キリストと同形のものにしようと思っている。

「キリストは神のかたちである」

と言うでしょ。コロサイ書に書いてある。今度は、我々をキリストのかたちにかたどらせんとする。「エーベンビルト・ゴッテス」「神の似姿」という。ヘブライ語で「セレム・エロヒーム」といいますが、その「セレム」に、キリストの似姿に私たちをしてしまう。キリストと同形にしようと、

予(あらか)め定め給えり。

と。予知し、予定する。あのカルビンの「予定説」というのはここから出てくる。

これ多くの兄弟のうちに、御子を嫡子(ちゃくし)たらせんが為なり。

神の直系にしようというわけだ。

30 **又その予め定めたる者を召し、召したる者を義とし、義としたる者には光栄を得させ給う。**

予知し、予定し、召命し、義認し、栄化する。栄光を与える。栄化でも聖化でもいい。予知・予定・召命・義認・栄化と来るわけです。パウロ神学がもうこれだけの言葉の中に全部入っている。

「知る」というのは、存在的に本当に知ることです。ヘブライ語で「知る」という言葉は、非常に人格的に霊的にその存在を深くとらえることを「知る」という。そういう意味で、「予知」という。

「自分は生れぬ前に既に神に選ばれた」

なんていうことをエレミヤも言っているし、パウロも言っている。

そういうように、我々の存在を深く知って、それを神の似姿にせんとして予定する。「似姿にする」と言ったって、現象的にするわけではないですよ。みんな君たちの顔はちがう。才能も、それからいろんなこともみんな違う。その違うそれぞれの特殊性においてキリストに似ることです。特殊性において。バラはバラらしく、撫子(なでしこ)は撫子らしく、そして本当に太陽の栄光体として百花繚乱である。みんながバラだったら、みんなが撫子だったらしょうがない。

一人びとりがそういうようにして、どこに置かれるか、どういうようにされるか定められる。そして今度は召すわけだ。召命する。「召命する」とは要するにキリストにぶつかるわけだ。そして、キリスト者としてそこにハッキリと救われることだ。召命を受ける。

そして、召命を受けて、義とする。「義認」という言葉は私はあまり好きではない。ちょっと観念的に響いてしまうから。義の本体はキリストです。キリストの義を与えることが「義とする」ということです。あるいは、

「義のキリストを与える」

と言ってもいい。義とは何かというと、これは正義ではない。神さまの御意を完全に行うことが義なんです。聖意を、聖なる意志を体現する。聖意を体現する者が本当の義人なんです。しかし、それができたのはキリストだけだから、

「義人なし、一人だになし」

とパウロが言った。誰もがそういった聖意体現ができない。神さまにむかって「はい」と言って、それを直ちに実行できないんだ。みんな逡巡して、頭でばっかり「はい」と言っている。全存在で「はい」と言ったら直ちに行動に移る。「はい」と言って直ちに行動に移るためには、上からの力を「はい」と言うと同時に受けとらなければダメだ。それができたのがキリストなんだ。だから、それを義人という。

神の御意が義なのであって、義というひとつの概念が他にあるのではない。義の内容は無限なんです。ユダヤ的にいうと、律法的な内容がだいぶこの義の中に入ってくる。それでパウロは躓いてしまったのだけれども。

「律法の義については責むべきところなし」

なんて、始めはいばっていたけれども、それはとんでもない間違いだった。

「それを塵芥（ちりあくた）の如く思う」

と彼は言った。それで、律法の義なんかは捨ててしまって、キリストの義をいただいた。そうしたら本当に自由の人になってしまった。だから、義を与えられるんです。

「キリストを受けとることによって義とされる」

というのはそのことです。この義のキリストが信において与えられる。観念的に受けとってはダメですよ。どこまでもこれを御霊の内実をもって受けとっていかないと。浮いてしまうですよ。義という言葉が何か堅苦しくて恐いように思っているうちはまだダメです。義が楽しくならなければ。自分の脊椎骨にならなければ。

そして今度は、それが我々罪びとをだんだん内側から浄化、栄化していく。そしてついに、「キリストの姿に化するなり」という。

「18 **我等はみな面（かお）おおいなくして鏡に映るごとく、主の栄光を見、栄光より栄光にすすみ、主たる御霊によりて主と同じ像（かたち）に化するなり。**」（コリント後3・18）

というのがこれと同じことなんだ。これは「栄光を得させたまえり」ですよ、「たもう」ではない。栄光を既に与えてくださった。何かしらんけれども、御霊が来ているから、パウロにはそこにもう栄光が来てしまっているから、「栄光を与えたまえり」と。ある意味において未来完了なんだけれども、それは現在完了の面があるんです。

「御国を来らせたまえ」

と祈れるのは、御国が来ているから祈れるんですよ。我々の胸の中に御国が来ているから、「御国を来らせたまえ」とハッキリ祈ると、祈りに力が出てくる。御国を内側にいただいていないで、「御国を来らせたまえ」なんていくら百万回祈ったって、そんな空念仏は届かない。法然は念仏を一日に何回も何回も、あれは一万回くらい称えたのか。しかし、親鸞は、そんな必要はないと言って、一度本当に「南無阿弥陀仏」を称えればいいという角度に親鸞は入ったから、親鸞の方がひとつ先に進んだわけだ。キリストも、

「異邦人のごとく繰り返して祈るな」

と言われた。魂をこめて一回祈れば、直ちにその世界に入ってしまう。

●福音の証

その30節までが今日のところです。本願の事態が望みとして来ている。これを受けとる

のは、内容は御霊です。明日はこの本願が今度は愛の世界にやってくる。これは体受する。そして、キリストと自分とは一つ。エン・クリスト。御霊の中に。御霊を宿すことによって。しかし、そのもととなるものは全部、祈りですよ。祈りのないところには、そういうものは生じない。

ここのところの祈りは一番深い意味において呻きである。万物の呻き。キリスト者、信徒の呻き。聖霊の呻き。この三種類の呻きをパウロは受けとっている。この呻きは即ち、祈りの呻きであります。しかしながら、それは全部、上からの光が来ているから、これは成就する。この信も現になる。キリストという現実は生まの現実に移っていく。

私たちは祈りの世界で、特に今学んだところの18節から30節まで、この危機的な20世紀、あと20何年だかしらないけれども、いよいよこの宇宙の祈り、聖霊の祈りを深めていく。これは実は本願の響きがそこに来ているわけです。

いつか京都で祈った時にU君が異言で、

「日本はこのままの精神状態では危ない」

という内容のパウロの呻きを書いた。パウロが天界で呻いている。日本はもう冗談じゃないと。今、御霊のキリスト者たちが本当にこのことを証言しなかったなら。我々がいくらやったって、もう日本はどうせ、成るようにしかならないかもしれない。けれどもいいよ。どんなにこの地上に望みがないようにみえても、どっこい、神の国は遺れる民を通して来るし、待っている。どんな現実を通しても神の国はそれらの人たちの中に生れていく。我々は善きものをたくさん作っていかなくてはいかん。一人でも二人でも余計に。そのためには何をしていても、福音の証とならなかったら、我々は本当に十字架を負っていることではない。もう神学いじりをしたり、ただ聖書の研究いじりをしているようなそんな時代ではないんだ。そういう意味において、今日読んだところは非常に深刻なところであります。